

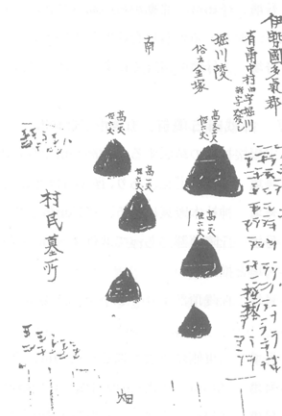
あつこないしんのうぼ 惇子内親王墓

惇子内親王は、平安時代の後白河天皇の娘で、高倉天皇の即位に伴い仁安元年(1168)に、数え年12歳で斎王に選ばれました。斎宮には嘉応元年(1170)にやってきましたが、間もなく体調を崩し承安2年(1172)に16歳で亡くなりました。

斎宮で亡くなった惇子内親王は、斎宮の周辺に葬られたと思われますが、具体的な場所の伝承は早くに途絶えてしまいました。

しかし、明治時代になると、明治政府による全国的な皇族のお墓の調査に合わせて、地元から明治16年(1883)に有爾中村にあった塚について、地元有爾中で「堀川」という地名があり、惇子内親王の別名である「堀河斎宮」と共通することから、惇子内親王の墓ではないかと申請が出されました。しかし、この塚からは斎王よりもさらに古い古墳時代の土器などが出土し、当時の宮内庁から惇子内親王の墓とは認められなかったようです。明和町でも出土品等を調査したところ、斎王制度以前の古墳時代に造られた古墳(円墳)で、発シ古墳群の一つである可能性が高く、惇子内親王の墓である可能性は低いです。

しかし、地元の有爾中では惇子内親王の墓として大切にされ、入口の木にシメナワが掛けられているほか、かつては慰霊祭などが行われていました。惇子内親王墓は町指定文化財として斎宮・斎王の伝承が斎宮地区だけでなく明和町全域にたくさんあり、それぞれの地域で語り継ぐ重要性を教えてください。



明治16年(1883)に地元から提出された上申書(一部)



昭和56年(1981) 地元による慰霊祭



今も正月前に地元の人がシメナワを掛けている